会報
みちびき
平成24年12月
第111号
東京都公立学校
情緒障害
教育研究会

平成二十四年度　都情研特別研究部夏季研修会講演（抄録）

「通常の学級で配慮を要する児童・生徒への具体的な支援」

筑波大学附属大塚特別支援学校　安部博志先生

一、授業改善から学校力の向上へ

(一)気になる現象

いろいろな学校の様子を見ていて、最近、気になる現象があります。それは、次のようなことです。

①ケースの支援は結局『イタチごっこ』に陥ってしまう。四月になって担任が替わると、またゼロからのスタートになってしまうという話をよく耳にする。

②人手による支援の限界を感じる。子供が支援員などと依存関係になってしまうこともある。中学年くらいになると、個別の指導を嫌がる子供もよく見る。子供は特別な人によって救われたいと思っているのではない。子供は仲間と一緒の授業で救われたいと願っている。

③校内委員会でケース検討をする時に、子供の障害の特性と保護者の受容の二点に焦点を当て過ぎてしまうことがある。この二点は教師や学校の努力ではどうにもならない。ケース検討ばかりでなく、授業改善に目を向ければ視界がパッと開ける。

④放課後の職員室に誰もいない学校がある。特に若い教師が教室に引きこもっている傾向がある。若い教師を自前で育てられない学校が増えている。

今求められているのは、個のケースをどうするかではなく、教師が協働して課題解決にあたる組織としての力『学校力』であると思います。

(二)学校力向上のための授業改善

発達障害のある子供が居心地のよい学級は、全ての子供にとって居心地のよい、やりがいのある授業を展開している学級です。発達障害のある子も含めた学級の運営をどうすればよいか、授業をどうすればよいか。教師が授業を変えることによって、救える子供たちを救っていくのです。求められているのは、障害についての専門性よりも授業の専門性だと思っています。

「学校力」を高めるためには、教師がお互いの知恵を出し合って日々の授業改善を追求する以外にはありません。そのためには、従来の学校研究のスタイルを少し変える必要があります。発表のための研究、「主体的、意欲的、生き生きと」などの曖昧な言葉による混乱、授業者が批判にさらされてしまう研究、学校全体の日々の授業が変わらない研究ではだめです。全ての学級の授業改善を目指す、その中で同僚性を高めていく研究が必要なのです。

例えば、普段の授業をビデオに撮ります。そこには、教師の癖や子供の素の姿が映っています。そして、夏休みに授業の改善点を話し合います。十一～二月に改善後の授業のビデオを撮り、比較検証します。最後に、授業改善の知見を共有し蓄積していきます。

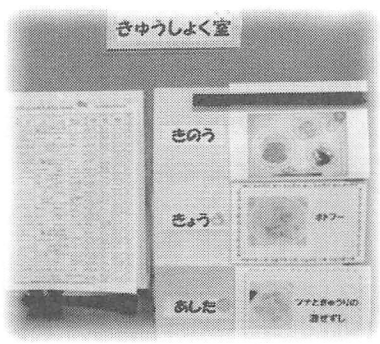
また、授業研究会の時に「批判ばかりしない」「授業の事実からものを言う」「必ず発言する」などのグランドルールを決めて行うことが有効です。

二、支援のポイント

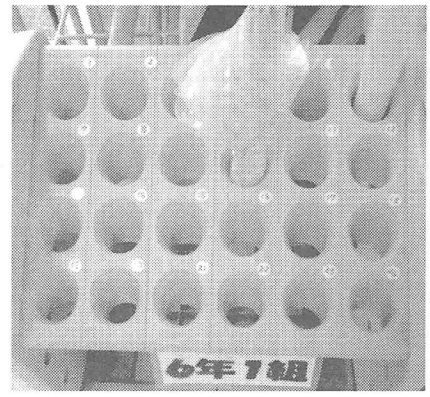
忙しい教育現場では、ちょっとした工夫でできること、特定の子供だけではなく、他の子供にとってもメリットのある支援策が有効です。

(一)物理的環境と言語環境を整える

スケジュールや予定、課題に見通しをもたせる取り組みがよく見られますが、楽しみな見通しが少ないようです。大塚特別支援学校の給食室前の掲示では、昨日の給食、今日の給食、明日の給食が掲示してあります。毎日変わる情報には子供が注目します。毎日、情報を変えるのがポイントです。



傘が乱雑に入れられていた傘立てを、子供たちの出席番号の書かれた傘立てに変えました。これだけで、子供たちの傘の間違いがとても減りました。傘を忘れていく子供も減りました。子供たちは何も言われなくても、傘をきれいに丸めて傘立てに入れるようになったのです。



(二)見えないものを可視化する（予定、ゴール、話、ルールなど）

大塚特別支援学校では、運動会のプログラムを遠くからも分かるように大きく掲示します。幼稚部、小学部、中学部、高等部、学年を色分けして示します。文字の分からない子には絵で示します。また、赤い矢印で今の競技を示しています。

これをやり始めて、自分から次の競技の準備をする子供が出てきました。常に教師が「次は～だよ」と指示していたら、子供は指示待ち症候群になってしまいます。できれば、子供が見て、自分の頭で判断して行動できるようにしていきたいものです。

次の写真は、ある幼稚園の三歳児のクラスの様子です。水道を使う順番待ちのために、待つ場所が○で示されています。また、学校の授業のねらいもできれば視覚化して目に見えるようにしたいです。短冊黒板にその授業のめあてを書くようにすると、あとで振り返るときにも、とても分かりやすくなります。

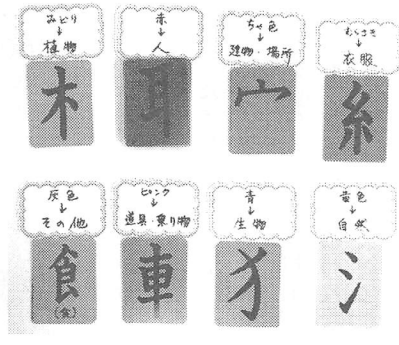
(三)課題達成のための手がかりを分かりやすく示す

次の写真は、ある幼稚園の片付けの場面です。片付ける物ごとにかごに分類され、表示があります。片付けるという課題解決の手がかりを分かりやすく示しています。この園では先生が何も言わなくても、子供たちは使ったシャベルなどを洗って、きちんと分類をします。この手がかりがあるからです。

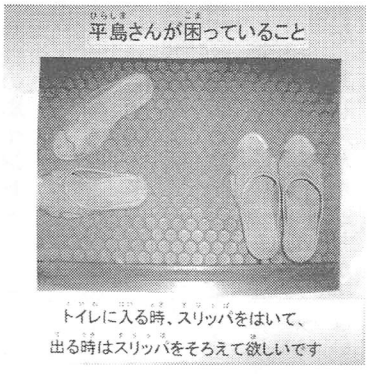
漢字部首カード＋部首でおぼえる漢字プリント（eduコミュニケーションMOOKプリ具3　1300円）は、小学校で習う漢字が部首別に分かれていて、部首のイメージに合わせた色がついています。このカードがあると子供たちで漢字の仲間集めやカテゴリー分けができます。

ウラ

オモテ



私の同僚が、「用務主事の平島さんが困っていることがあるよ」「トイレから出る時は、スリッパをそろえて欲しいと平島さんが言っているよ」と子供たちに指導しました。

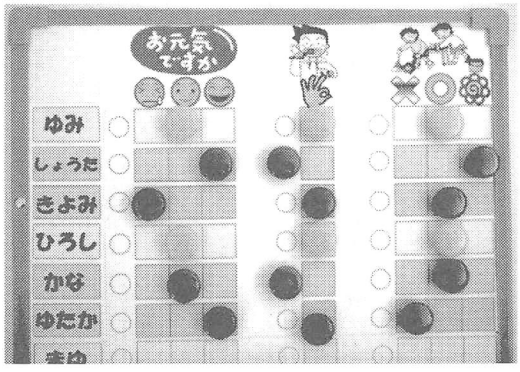


知的障害や発達障害がある子供には、言っても分からないだろうという気持ちで、「～しなさい」と結論だけ、スローガンのように伝えることが多いように思われます。何の為にそれをするのか、何故するのかを何度も繰り返し伝えることで、そうすることの意味が分かり、子供の人権を守ることにつながります。やらないといけないからやる、叱られるからやる、ではいつか元に戻ってしまいます。何故それをするのか、本当に心に落ちた場合は、ずっとそのように行動していきます。

(四)学習機会を増やし授業への参加率を上げる

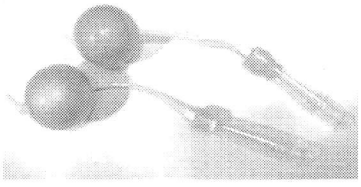
特別支援学校や特別支援学級では、一人ずつ丁寧に、モデルを教員が示したり、説明したりしながら進める場合がよくあります。しかし、同時多発的に「さあ、みんなで自分の道具を持ってくるように。さあ、一緒にやるよ」と一斉にやると、子供の活動量がとても増えます。待つ時間を減らすことは、非常に大事な授業改善のポイントです。

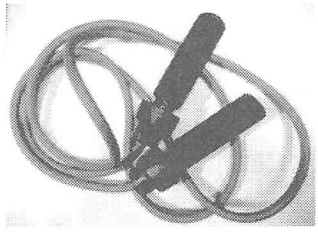
また、次の写真のような表に元気か元気でないか、歯磨きが終わったかどうか、掃除を自分ががんばったかどうか、自分でマグネットを置いていきます。いつも教師が評価するのではなく、子供が磁石を動かすことで自己評価・自己表現させることができます。



(五)教材教具を工夫して成功体験に結びつける

縄跳びが跳べない子は、腕ごと回してしまいます。縄跳びは「手首を回す」動作と「跳ぶ」動作が合わさったものなので、それを分解して教えます。ゴム球を縄跳びの縄の先に付けて手首を回す練習をさせます。まず、手首を回す感覚を体に覚えさせて、それから跳ぶという動作を合わせていくのです。その後、ウェイティーロープ（ゴムホースでも良い）などを使い、まずできるようにさせて、次第に回数を増やしていくことが大切です。できないことを、叱咤激励してがんばらせても子供の自尊感情が低下してしまうだけです。まずできるようにさせるのです。

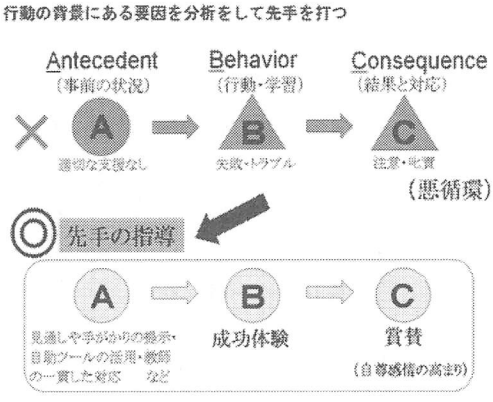




（上）手首を廻す教材１００円ショップのゴム球　（下）ウェイティーロープ 400g ¥3,746

(六)行動の背景にある要因を分析して先手を打つ

問題行動というのは、教師にとっては問題行動ですが、子供にとってはコミュニケーション行動であることが少なくありません。つまり、「先生、分からないよ」「やり方（手がかり）を教えてよ」「もっと僕にかかわってよ（注目してよ）」というような声にならない言葉が問題行動になっている場合が少なくないのです。その時に、叱って変わる子はもともと自尊感情の高い子です。発達障害のある子は叱ることで行動修正はできません。問題行動の事前の状況・行動・結果を客観的に記録するのです。事前の状況のなかにヒントがあります。事前の状況のなかで、見通しや手がかり、自助ツール、教材・教具などを工夫することで、失敗やトラブルではなく、成功体験に意図的に導くことが必要です。子供が叱られるような行動をする前に、どんな工夫ができるか、そこに解決のヒントがあります。そして、原因や機能に応じた対応をすればよいのです。



注目を得たくてその行動をしている（教室からとび出る、つば吐きをする）子には、注目をしてはいけません。大塚特別支援学校では、そのような時、教師は皆子供に背中を向けます。一人だけさりげなく安全確認をします。注目行動の時にはなるべくかかわらないことが大切です。適切な行動、他の子では当たり前だけれど、その子がきちんと座っている、給食の牛乳を配っている、その

ような時にかかわっていくのです。多くの場合、不適切な行動をした場合に注意をしたり、修正したりしようとします。関係者で首尾一貫した対応がとれるとよいです。

ある小学校で、一年生のアスペルガー症候群の子が授業がつまらなくなり教室からとび出しました。その子はまず保健室に行きました。保健室では養護の先生が優しくかかわってくれました。職員室に行くと、副校長先生が声をかけてくれました。

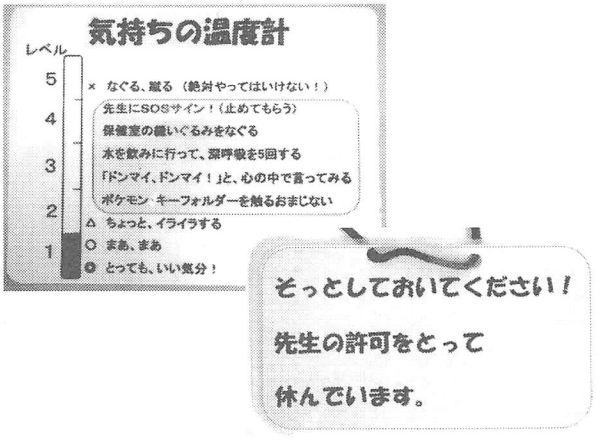
彼はどのような学習をしているかというと、授業がつまらなくなって教室からとび出れば、保健室の先生が優しく声をかけてくれる、副校長先生がかまってくれる、ということです。これは誤学習です。環境を整えることによって変えることができます。私だったら、彼に通行手形を渡します。「気分転換のために教室を出ているけれど、5分で戻ります」という札を首からぶらさげさせます。それを見た他の教員は、彼にかかわるのではなく、スルーします。担任は彼が戻ってきたら、戻ってきたことを褒めてあげるのです。こういった対応が必要です。問題行動を修正するのは子供ではなく大人の側なのです。大人側の対応を変えることによって、多くの問題行動が解決できます。

原因や機能に応じた対応を心がける

想定される原因（機能）	☞	望ましい対応
●注意を自分に向けて欲しい	☞	注目行動に対しては計画的無視を徹底し、たとえそうすることが当たり前でも適切行動だけを強化する。（誤学習を修正する手続きの導入：DRO, DRI）
●課題が難しすぎる	☞	課題の難易度と分量を調整する。課題解決のための手がかりを分かりやすく提示する。
●物や活動の獲得	☞	適切なコミュニケーションの方法を教える。
●先の見通しがもてない	☞	予定とゴールを示す。課題が終わった後に楽しみな活動を設定する。
●暇でつまらない	☞	魅力的な授業にする。課題を自己選択させる。

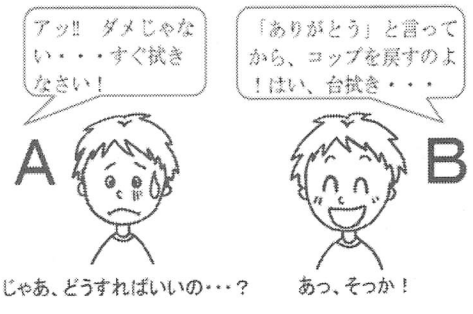
(七)感情や行動をコントロールする方法を学ばせる

気持ちの温度計などの教材を使って、自分の気持ちを認識させます。イライラしてきてレベル3やレベル4になったら、合法的に教室から出してあげた方がいいです。「これ（通行手形）をもって校長先生の所へ行ってきなさい。」と言います。校長室では、リセットのための体操をさせたり、水を飲ませたりして教室に帰します。ずっと我慢させるのは難しいことです。



(八)学び合いの学習から互いの多様性と善さに気づかせる

手加減や調整力を日常の生活の中で養います。ある幼稚園で友達にお茶を注いでもらっている途中で、よそ見をしながらコップを引いてしまい、お茶がこぼれてしまう場面が見られました。わたしは「まずい、こぼしちゃった」と思いましたが、この子達は平然としていました。その理由が先生の対応でした。先生は下図のBのような対応をしたのです。つまり、叱らずに適切な行動をサラッと伝えたのです。教師が下図のAのような対応をしていれば、子供たちもそのような対応をとったでしょう。

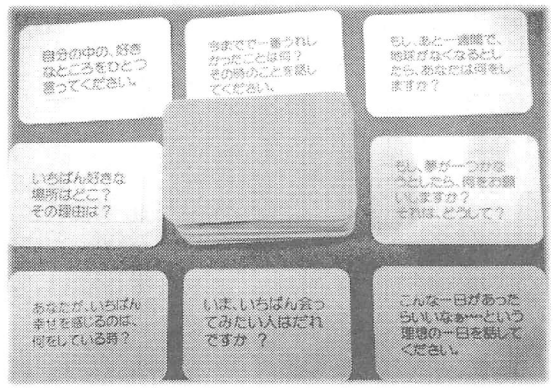


意図的に重いものを複数で運ばせることも有効です。大塚特別支援学校幼稚部では幼稚部の子でもサーキット運動をする時には数人で重い物を持ちます。相手に歩調を合わせることは、社会性の発達の第一歩です。

(九)社会性や自尊感情を高める仕掛けを設定する

傾聴と自己開示によって関係性を改善するゲームがあります。カードを一枚めくってそこに書かれていることについて話します。誰かが話している時には決して質問したり、茶々を入れたりしてはいけません。自分の琴線に触れること、話せないことはパスすることができます。このゲームは、いつまでも飽きずに続けることができます。今の子供はお互いのことをあまり知りません。

このゲームによって友達の悩みや将来なりたいものなどお互いの理解が深まります。傾聴してもらえるからこそ自分のことを話すことができます。学級経営や授業改善でできること、クラスの成員である一人一人の子供の関係性の改善でできることの両方を合わせ技でやった方がよいと思います。



(十)リフレーミング

異なる視点から物事を捉えることを学ぶことも必要です。発達障害のある子供は、マイナスの言葉で捉えられがちです。普通の子の五倍も十倍も叱られて育ちます。だから、自ずと自尊感情が低下するのです。二次的障害に陥ったり、虐待を受けたりする場合も多いです。せめて教師は、この子らに対して、リフレーミングして言葉がけしてあげたいものです。プラスのストロークはプラスで返ってきます。

リフレーミング

- □あと５分しかない　→　まだ５分もある
- □いいかげん　→　こだわらない、よい加減
- □おしゃべり　→　人との会話を楽しめる
- □変わっている　→　味がある、豊かな個性がある
- □気が強い　→　積極的、弱音を吐かない
- □気が弱い　→　（　　）
- □ずうずうしい　→（　　）

(十一)バックワード・チェイニング法

山登りをするとして、発達障害のある子供は、一合目から登らせると、三～四合目で息切れしてダウンしてしまいます。だから、いつも頂上の清々しい景色を見ることができないのです。そうではなくて、七合目までは支援をし、七合目から頂上を目指させるようにします。そうすると「やったね。景色が素晴らしいね」と常に成功体験を経験することができます。ゴールから逆算して支援のレベルを考えていくことが大切です。

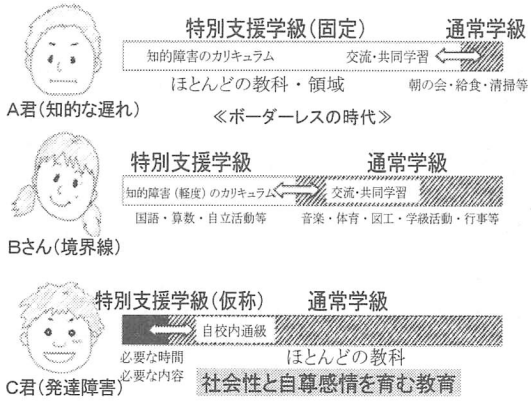
三、特別支援教育がめざすもの

今までの日本の教育は、異質なものを排除してきました。多数派・定型発達の人が中心、効率重視の社会です。これからは、異質なものも自然に受け入れられる懐の深い社会の実現を目指すのです。発達障害のある子、知的障害の子、老人、移民、外国籍の人、背の低い人、高い人、全部ひっくるめて共に歩んでいこうという温かい人間観と教育観に満ちた社会です。これを実現するために特別支援教育はあります。その第一歩がインクルーシブな教育の実現です。そして、最終的にはノーマライゼーション（当たり前な社会）の実現です。

ただし、障害のある子がただ通常学級にいればいいという考えには反対です。この子たちが通常学級で学ぶためには手だてが必要です。通常学級で学ぶことの意味は何か、通常学級の担任と特別支援学級の担任と保護者が綿密に打ち合わせをする必要があります。

そもそも教育は何のために行われるのでしょうか。子供の幸せとは何でしょうか。それは、人とのかかわりの中で、自己の存在価値を自覚して前向きに生きることです。これからは、社会性や自尊感情をはぐくむ教育が求められる時代です。

「特別支援教室（仮称）」を東京都が平成二十八年度から小学校に順次作っていきます。ここで行われるべきことは学習を補完することではありません。社会性と自尊感情を育む教育が展開されるべきです。



GDP（Gross Domestic Product: 国内総生産）の向上よりもGNH（Gross National Happiness: 国民全体の幸福度）の向上を目指すのです。合理性と効率性ばかりが追求されるGDPの発想の教育ではなく、子供たちの幸福度の向上を目指す時代がきていると私は考えます。

◎参考文献◎

「発達障害の子どもの指導で悩む先生へのメッセージ―結い廻る：つながっていきましょ！―」（安部博志著　明治図書）

夏季集中研修会報告

練馬区立豊玉南小学校　坂井英子

情緒障害等通級指導学級の担任を対象とした夏季集中研修会が八月八日九日の二日間、中央区立月島第一小学校をお借りして開かれました。小・中学校を合わせて両日とも二百五十名程の多くの参加者がありました。今年度は講演会とグループ討議という内容で研修会を行いました。

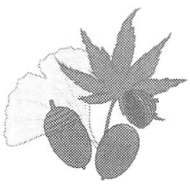
一日目の講演は「発達障害（自閉症、学習障害〈ＬＤ〉、注意欠陥／多動性障害〈ＡＤ／ＨＤ〉等）の理解と指導」という演題で江戸川区立本一色小学校の有澤直人先生にご講演いただきました。

始めにそれぞれの障害を医学的にどう捉えているか、歴史面からのお話の他、学習障害への対応、また注意欠陥／多動性障害のある人の内向世界、理解とかかわりのポイント、基本的な姿勢等について具体的にお話して頂きました。そして歴史的にまだ新しい概念である「発達障害」については、定義から診断基準、定型発達と発達障害の連続性、発達の領域とその障害まで、また、自閉症スペクトラムについては、研究の歴史、基本的な障害、本人の感じ方等の他、支援の仕方や通級による指導で何を取りあげるか等について教えて頂きました。認知特性を理解し、それぞれに応じた対応をするためにも何度も学ぶことが必要であると思いました。

二日目の講演は「認知行動療法を活かした発達障害への支援」という演題で駒澤大学教授の有光興記先生にご講演いただきました。認知行動療法の考え方から始まり、私達がふだんかかわっている子ども達の日常生活に起こりうる具体的な事例について、認知修正の仕方、スキルトレーニング、般化などについて大変分かりやすくお話して頂き、多くを学ぶことができました。

二日目の午後は十名前後のグループに分かれてグループ討議を行いました。今回はテーマを設定せず、各グループの参加者一人ひとりが抱えている各学級の問題や現状について話し合い、また情報交換を行いました。時間が足りなかった等の感想があり、充実したグループ討議となりました。

毎年、情緒障害等学級が急激に増設される中、他地区の先生方と交流し、様々な情報交換をしていくことの重要性を再確認した研修会でした。



全情研　島根大会報告

全情研事務局長　有澤直人

八月二日三日の二日間、島根県民会館において第四十五回全国情緒障害教育研究協議会島根大会が開催されました。島根県内はもとより、全国から約一二〇〇名の参加者があり、熱気にあふれた二日間の大会となりました。大会テーマは「一人一人の自立につなげる支援の充実をめざして～実態のとらえ方と指導・支援、連携のあり方を探る～」というもので、幼児教育から就労までの各ライフステージでの「横の連携」と、「縦の連続性」の構築に向けての取り組みが紹介されました。

大会第一日目の記念講演では、浜松医科大学の杉山登志郎先生から、「発達障害の親子支援」という演題でご講演いただきました。先生の幅広い臨床経験から、様々な事例を紹介してくださり、発達障害者本人への治療や支援だけではなく、親への支援も念頭に置いて支援していくこと、親子の並行治療の重要性に目を向けることができました。

基調講演では、文部科学省特別支援教育調査官の石塚謙二先生が、「これからの特別支援教育の課題　～インクルーシブ教育システムの構築に向けて～」という演題でご講演くださいました。

プログラムはシンポジウム、大会二日目の分科会へと続き、発達障害の幼児・児童・生徒に対する支援について、実践事例をもとに熱い議論が交わされました。

東京からは十数人の参加者があり、夜の交流会では全国の先生方と交流を深めました。全国大会の魅力の一つは、様々な実践をしておられる先生方と直接話ができることです。この体験は確実に自分の視野を広げることにつながります。来年は、北海道札幌での大会です。大勢の先生方の参加を期待しています。

お詫び

庶務部・広報部

四月の定期総会配布資料、並びにみちびき前号の「新設学級、再開学級、休級等一覧」の内容に間違いがありました。ここにお詫びと訂正をいたします。

目黒区立第七中学校

《正》つばさ学級

《誤》すずかけ学級

編集後記

広報に関するご意見、ご感想がありましたらお寄せください。

☎０４２－４８８－２８６１
調布市立柏野小学校
編集・発行　広報部
印刷　㈱ワールドミーティング